

# 歌を口ずさむように、星をみあげよう

一般社団法人星つむぎの村 高橋真理子

第41回『山の都ふれあいコンサート』、開催おめでとうございます。急速な変化の多いこの社会にあって、思い変わらず続けてこられたことは、関わってきたすべての人たちにとっての大きな財産だと思います。

私とふれコンの出会いは2008年。当時、私は、山梨県立科学館のプラネタリウムの職員で、2007年から「星つむぎの歌」プロジェクトを行っていました。「みんなで星をみあげ、感じることを言葉にし、それをつむいで歌にしよう」と全国に呼びかけ、1年近くかけてつくられたこの歌は、甲府の中学校出身の土井隆雄宇宙飛行士の応援歌であり、山梨への応援歌でもありました。延べ2490人の人たちの想いがつながって星座がつくられたようなできごと。星を見上げるこの意味を深く教わったプロジェクトでもありました。

2008年、第10回ライトダウン甲府バレー（現ライトダウンやまなし）に、「星つむぎの歌」を歌う平原綾香さんと、土井隆雄さんがきてくださいました。山梨のどこにいても星つむぎの歌が聞こえる、そんな夢を描き、それにこたえるように、平原さんを取り囲んで手話で歌ってくれていたのが、ふれコンのメンバーでした。

翌年には、日本科学未来館で行われたサイエンスアゴラという大きな科学祭のクロージングセッションで、星つむぎの歌がテーマとなり、科学館の「星の語り部」のメンバーと、ふれコンメンバー60名以上で、手話つきの大合唱を行ったのです。この感動体験は、のちの「星つむぎの村」をつくりだす原動力になったといっても過言ではありません。



サイエンスアゴラで星つむぎの歌 大合唱





お話をしている跡部浩一氏



「星つむぎの村」は、「星を介して人をつなぎともに幸せをつくろう」というミッションのもと、全国に散らばる「村人」とともに、プラネタリウムや観望会、ワークショップや創作活動などを行っています。

特に、力をいれているのは、「病院がプラネタリウム」。病気や障害、環境などによって、ほんものの星空が見られない人たちに、星空を届ける活動です。2014年からこれまで、およそ5万5000人の方たちとともに、プラネタリウムの星空を見上げてきました。病気や社会の障害とたたかわざるを得ない人たちと多く出会い、「ともに生きる」という言葉のほんとうの意味を、何度も考えさせられる経験となっています。

歌を歌うことも、星を見上げることも、さまざまな境界を乗り越えていくこと。そして、歌うことも見上げることも、祈ることにとってもよく似ています。同じ星空の下、ふれコンのみなさんと、ともに同じ時代を生きられることに深く感謝し、これからもずっとともにいさせてもらえたらと願っています。

<https://hoshitsumugi.org>

